『教育科学研究／実際家のための教育科学』一九五四年一月（二葉）

社会学習における地理・歴史

矢口　新

（一）

社会科とは、社会について学習する教科であるが、この場合、社会というのは、日本人が一般にもっているような漠然とした概念、人々が集って生活している世の中という概念よりもう少し限定されたものである。もちろん言葉はどうでもよいのであって、世の中を学ぶといって決してわるいのではないが、その根底には、よく言われるような十九世紀になって新しく発見された社会というその社会概念があるのである。そうでなければ、一つの教科をなしてまとまったものとして学習されるということはない筈である。やはり社会というものを学ぶという考え方がはっきりあるのであって、それが社会科という教科の成立の地盤なのである。だから漠然と世の中のことは何でも学ぶというはきだめではない。

十九世紀になって発見された社会などというその社会は、即ち社会学習によって学ばれる社会は、個人に対する或ものとしての社会で、そういう概念をたて、われわれが問題としなければならぬ程、われわれの生活はこの社会に規定され、限定されているのである。われわれが集団をつくって生活していることそのことが、逆にわれわれの個人的な生活を動かしているのである。こういう社会というものの性格を究め、またそれを究める仕方を学ぶことが社会学習のねらいであって、そういう学習が今後の人間――これは同時に個人であり社会である所の生活者――にとって是非とも必要なのである。

こういう社会を学ぶにはどういう方法をとるかというと、現在行われているように、社会が生み出した現象をとり扱って、これを整理、解釈して、そういう現象を生み出した社会の性格を究めるという方法をとるのである。問題学習とか、問題解決学習とか、単元学習とかいろいろに言われるが、要はこの点につながっているのである。しかし具体的に行われている学習をみると必ずしもこの点がはっきりしていないように思われる。何でもわれわれの世の中にあるものについて学べばそれが社会科などと考えているかの如き社会学習も多いのである。よくある低学年の交通機関に関する学習などは、そういう考え方をよくあらわしているようである。昔から今までの交通の道具の種類をしらべて形やはたらきを考えているが、これはあまりに物にとらわれた学習であって、社会学習とは縁が薄いようである。ただそういうものについて、学習するのでは、社会科などというものは、雑学以外の何物でもない。交通現象を通じて、社会を学ぶのが社会科のねらいであって、たとえ低学年で具体的なものによって学ばねばならぬとしても、社会を学ぶというねらいを外してはならない。だからただ交通機関の種類と早さが問題なのでなく、それが社会の生きて行くのにどう働いているかが問題なのである。或はまたどういう社会が、どういう交通機関を生み出したかが問題なのであって、たとえ低学年でも、

そういう見方をしなくてはならぬ。ほんの一寸した点でも、そういうものが積みあげられて行けばよいのであるが、現在行われている単元をみると、ただの雑学が横行していることも否定出来ないのである。

これは一言にして言えば、社会現象としてみるという見方がはっきりしていない所に原因があると言えよう。これは主として教師の問題でもある。今まで教師は、そういう見方を身につけるように教育されて来てはいなかった。否われわれ日本人全体の問題だといってよかろう。そこに社会科の大きな問題があるのである。

それはともかく、このように考えて来ると社会学習のあり方は、社会現象を整理し、解釈することによって、社会そのものを把握して行く所に考えられなくてはならぬことが明らかであろう。社会をみるというのは、常に具体的な現象に於て、それを整理し解釈して成立つのであって、そういうことが社会を理解するということなのである。われわれに必要なものは整理し解釈し把握していく力なのであって、それがわれわれの生活に役立つのである。社会とはかくかくのものであるなどという抽象的、概念的知識なのではなく、そんなことでは何の役にも立たないといってよいのであって、大切なことは、次々へと新しい現象を生み出している社会のその現象をとらえて、これを通じて社会をとらえることが出来ることが必要なのである。

もちろん社会が次々へと新しい現象を生み出すといっても全く新しいものが生み出されるのでなく、それは過去から現在、未来へとつながっているのであって、新しいものも、過去のものから出て来て、その上に積みあげられて行くのである。だからわれわれが今の社会の現象をとらえ、それを構造的に把握しておくことが、次の現象を構造的に把握することが出来る基盤となるのである。その意味で、現在の社会というものをかくかくであると把握しておくことは必要であるが、それはあくまで現象を通じて自らの力によって、これを整理し解釈し構造づけておくということである。ただ概念をおぼえておくということではないのである。

だから社会学習は、生活の現実を取りあげて、これを考えて行くという方法で行われなくてはならぬと言われるのである。所が現在はこのような現実の現象をとりあげて、社会を把握していく学習が多いとは言えないのであって、多く教科書を読ませて、概念的知識をあたえることが横行している。社会学習が力あるものにならぬことの一つはまたここにあるのである。教科書で現在あるものは、多く現実の社会現象というよりは、おとぎ話的なものが多いのである。また教科書を書く人の頭の中にある概念が述べられているのが多いのである。それは自分で現実を整理する時の参考として提出されているのである。あくまで、社会を把握する手段として使われなくてはならぬものである。そういう考え方で教科書が使われるならば、これは所謂教科書学習ではないであろう。ほんとうの意味で教科書を使うことが出来れば、その他の材料として社会の現象、例えば子供のまわりにある様々な現象を社会現象としてとりあげることも出来る筈である。所がそういう学習が成立って来ない所に問題があるのである。結局依然として教科書の中の概念をおぼえることが学習であると考えられる風潮は根本的には除去されていないということである。こういう地盤の上で最近、地理歴史教育の問題が起っているのである。昔の地理、歴史の教育はおぼえる教育であったので、おぼえる教育としては、昔のものがよいように考えられて来るのである。

（二）

地理、歴史の問題はしばらくおき、社会学習の問題をもう少し進め

てみよう。社会の現象を取扱うというが、それを現在われわれはどういう系列でとりあげようとしているかというと、二つのことが考えられている。即ち第一に社会といっても、その社会には様々な段階がある。空間的により広いひろがりをもった社会もあれば、社会空間としては狭い社会もある。家庭とか、学校、社会などと言われ、また地域社会とか国家とか、世界とかが考えられるのはそういう問題なのである。そうして極く一般的には、子供はより具体的な社会空間の現象を取扱うことは出来るが、広い社会について取扱うことは無理であるとされている。そこで低学年になればなる程、家庭とか、学級とかの狭い社会の現象を取扱い、次第に地域社会に進んでいく、更にこれを土台にして、国家とか世界とかのひろがりをもった社会の現象を取扱うというように考えられている。いわば、子供が如何なる立場に立ちうるかということを考慮して社会現象をとりあげる目安としなくてはならぬということである。これは子供ばかりではないが、国家即ち国民社会の立場に於て社会現象を考えるということは、かなりむづかしいことである。議会の代議士となってもそれが可能であるとは限らないのである。そこで具体的なものから次第に、そういうひろがりをもった社会の立場に於てものを考えさせ現実を把握させようとすることが系列として考えられなければならぬとされるのである。

第二にそういう社会が生み出す現象を如何なる角度に於てとらえるかということである。社会のありとあらゆる現象をとらえるのでなく、社会の性格をとらえる典型的なものを取扱い、それによって、現在の生活が基本的に必要とするものを把握しようというのである。これがいわゆる社会機能といわれているものであって、社会のはたらきの根本的な領域を考え、それによって、社会の現象を選択する目安としようというのである。それが社会の現象をとらえるめがね（スコープ）である。

さてこうして、子供に社会を把握させる学習が行われるのである。即ち或る社会の、ある根本機能について、その領域に属する現象が子供に提供され、これは社会の如何なる性格を物語るものかと問題を出して考えさせていく。最初はその子供で常識的にわかる現象が提出されて、次第に考察を進め不足を補って、整理、解釈して社会の一面を把握する。これを単元などとよんでいるのである。いわば或る一つのまとまった学習のプロセスである。導入、展開、終末などというやかましい形式をもったのが単元なのではなく、子供がその時の段階でとらえられる現象から出発して、それを整理していく中に次第に次の現象を要求して、一応の社会の性格をとらえる。わからぬ問題はそれとして残し、わかる限りに於て一応の結論を出すというのが、社会学習のあり方なのである。

さてこのように考えて来ると、現在の社会科はただ単に教科書を読んでいるだけであるということに致命的なものをもっているのである。具体的な社会の現象を取扱うということが忘れられているからである。それは一面に教科書の書き方にもよるのであるが、真に社会現象を取扱うとなれば、常に一定の空間、時間に於ける社会現象であることを無視することは出来ないのである。そうして、ただ何所の誰ともわからぬ人間の間の出来事が叙述されているものを読んでいるだけであるというのでは、社会科にならないことになる。社会学習は、何よりもまず自分のつながっている社会の現象を取扱うのである。そうして学習することによりその自分のつながる社会を次第にひろげていくのである。だから一面から言えば、自己の関係する社会空間や時間をひろげていくのである。こういうことがなければ、現実の社会に生きて行く人間となることが出来ないではないか。現在の社会科が、

現実性がないといわれ、甘いといわれるのは何よりもここにあるのである。

そうしてこのことが、根本的には最近うるさく言われ出した地理、歴史の問題なのである。教育内容として地理、歴史を問題にするとき、われわれの頭の中には、つい最近まで教科としての地理、歴史が頭に浮び、具体的には教科書によって提出されたあの知識の体系が思い出されるのであって、それが問題の根本的な究明をさまたげているのである。そういう既成の形式を白紙に還元して、一体地理、歴史を見るとは何であるかを考えてみる必要があるのである。言いかえれば、自然の景観をみたり、地勢を考えたり、人間生活の空間的な配置を考えたりするのは何故であるか、どこにその必要があるのかを考えてみることである。或は、人間の生み出したもろもろの文化、即ち政治の形や、経済のあり方や、科学技術等々を時々の序列に従って見ることは何故に行われなければならぬのか、その必要はどこにあるのかを考えてみることである。そうすれば問題は社会学習に於ける現実性の問題の所にもどって来るのである。次にその問題について考えてみよう。

（三）

話を具体的に進めよう。例えば小学校の中学年生がかりに日本の産業の問題を学習するとする。一つの単元の中で水産業とか林業、農業、工業を学ぶことも考えられようし、或は一つ一つを単元として学ぶことも考えられよう。今はそういう形式はさして問題ではない。中学年生であるから、極めて具体的なことが取扱われるであろう。恐らく地域社会の現実を中心にして、学習はすすめられるであろうし、子供の具体的な生活内の問題を中心にして、考察は進められるであろう。例えば山の子供が水産業を研究するとすれば、自分たちの食べる魚はどこからどうして来るのかといった程度のことから入るのであろう。併しそれにしてもその学習は、社会の存在の仕方を把握することであるから、例えば、山の人たちが生活するために、社会の他の産業がどのような役割を果しているかといったことが学ばれることであろう。そうして社会というものは、遠くはなれて、まるでちがった生活の仕方をする人々の相互の関連にて成立つということが、子供は子供なりにわかって行く。

このことは併しただの概念では成立たないのであって、またそういう概念だけでは意味がないのであって、現実に生活しているその事実に結びついて、身体的なつながりをもち、そしてその意味をひき出して来る所に学習の意義があるのである。遠く離れた人々の相互の関連というのは、具体的にはどこに住む人と人との関連であるかが把握されてそこから出て来た意味なのである。

このようにして、日本の産業を通して日本の社会の生活の仕方が現実的に学ばれるならば、必然的にその学習に於ては、自分を中心として社会のもっているひろがりにふれなければならぬ。どこにすむ漁師が、どこから魚をとって、それがどうして山の人たちに送られて来るかということが、現実的に把握されなければならぬのである。だからそこには、所謂地理的なものが当然取扱われなければならぬのである。山の子供の中学年程度でいえば、日本海や太平洋の海、そのどの辺でどういう魚がとられるか、それが自分たち山の人々の中に送られるということで、人々の生活が成立っているという事実が、取扱われることになるのである。林業にしても、農業にしても、工業にしても、この点は同様であって、それぞれ、地域社会の生活の形が異るであろうから、従って子供のもっている常識経験の程度が異り、それに応じて、具体的な生活事実の意味は異るのは当然であるが、社会の性格を把握

する本質には変りがないのである。やはり、われわれの社会のもっている産業の形を通じて、われわれの社会の性格を学びとるのである。農業でいえば、如何なる地域に農業が行われ、それがどういう役割を果しているかが問題となるであろうし、林業もまた、どこにどういう形で行われて、社会の生活に如何なる意味をもっているかが把握されるであろう。こうして中学年には中学年にふさわしい形で、現実が把握されて行くので、それが所謂地理の学習をも含んでいるのである。

産業の例についていえば、この産業の事実を現実的に学習することによって、それぞれの所で社会がどれだけの自然空間に於て、どういう産業を成立させ、それがどのように相互に関連しているかを学ぶのである。地理とは具体的な生活に即して見えて来るのであって、例えば、山ということであっても、山の生活者にはその資源を提供するものであり、農業にとってはこれは阻害条件となり、交通にとってもまた克服すべき対象となる。このように生活の問題に応じてそれぞれ山が見られて来るのであって、ただどこがどういう地勢となっているかを見るということは本来ない筈のものである。子供が真に山という地勢を問題にして理解するには、そういう様々な立場に立たせて、その都度問題にさせなければ、真にこれを把握することは出来ないのである。このように地理という側から考えても、まず生活が問題なのであって、そういう立場のない地理は成立たないのである。従って、生活を様々な角度から見て行くことを通じて、くりかえし、くりかえし地理が見られて行くことが大切なのである。

先程の例で言うなら、中学年程度では、恐らく、日本の地勢の極く概略、例えば日本は山が多く、四面海にかこまれているとか、どの側に高い山があるとかいった程度のことは、林業や水産業や農業や交通などの学習を通じてくりかえし、くりかえし、その度毎に取扱われるのである。このようにして生活に於ける自然の空間の意味も明らかになるのである。これは何も中学年に限ったことではなく、次第に上学年に進めば、それに従って生活の分析も細かくなり、それに従って地理もまた細かく見られるようになるのである。

（四）

以上のような考え方は、歴史に於ても同様である。歴史の側から考える前に、社会学習の側から考えてみよう。前述の小学校中学年程度を、例として具体的に考えてみよう。小学校の三、四年程度では、恐らく極めて簡単なことしか理解出来ないであろうということは、様々な研究から実証されている。そのことも考慮に入れて考察しなくてはならないが、考え方としては、産業の現象を通じて社会の性格を把握して行く学習が現実的に行われるならば、当然時代が問題となるのである。社会が過去になして来たことを見て現在が明らかになるのであって、常に過去との比較対照を行うことが今の社会の性格を知る絶対の条件なのである。小学校の中学年生ならば、過去といっても、今と異る昔の時代としてのみ比較対照になる程度であろうが、たとえそれであっても、今の社会の規象と、昔の現象との差異は把握されなければならないのである。昔の人々の交通がどのように密度が薄かったかということをみて、今の交通の社会的性格が明らかになるのである。

言いかえれば、今の社会を学ぶには、昔の社会を見なくてはならぬのである。これは一面から言えば時代的観念を得るということであろう。昔の社会の生産の仕方や、道具の使い方や物の流通の仕方を今と比較してみるのもこの時代がわかることなのである。小学校の中学年程度では、それは極く大略がつかまれるだけであるけれども、高学年になり、現在の生活現実の取扱いが次第に細かくなるに従って、それ

に応じて昔の社会との比較も細かくなり、従って時代もいくつかに分れてくるであろう。それは今の社会と異ったいくつかの社会の類型がとらえられるということである。

歴史が見えてくるというのは、このように今の社会と異った社会が見えて来ることであって、ただ交通機関の異った種類をみることなのではない。今と異った構造の社会がとらえられることであって、そこに自分との異りを発見し得るのである。自分と自分の社会が昔の社会と生活の仕方に於て異っていることがはっきりすることである。産業や交通や文化の現象を通じて問題にすることは、常にこの現象を生み出した社会の姿なのである。だからたとえそれぞれの個々の現象をとりあつかっていても、常に社会の生活のあり方、社会の性格という全体を問題にして行かなくてはならぬのである。その全体を見るのに具体的には個々の現象を観点として見るということである。このようにして、くりかえし、くりかえし、様々な現象を通して常に全体社会を問題にして見て行くことを積み重ねて、時代を見ることが出来るようになるのである。そしてそれが同時に、今の社会を真に見ることが出来るようになったということなのである。

われわれは、歴史を学ぶというと、曾つての教科書に通史として書かれたあの叙述を思い出すのであるが、それは必ずしも歴史を学んでいることではないのであって、ただ人の名前や、政治の形や、文化的遺産の名称を同一平面上に羅列しておぼえているのである。今の社会との差異が比較対照されて昔の社会が歴史としてうつって来るということを忘れてはならないのである。歴史が漸くわかるようになるのは、十三、四歳頃であると一般に言われているのは、一面から言えば、以上のような具体的な現象を通じて社会のちがいを把握する学習をくりかえして行くということを必要とするということである。ただ過去にあった事についての概念だけおぼえるということは歴史を学習することにはならぬのである。

以上述べたことよって、所謂地理、歴史の教材は社会学習の中に於て真の意義を発揮することが明らかであると思う。そこで問題はそのような社会現象の取扱いを具体的に一つ一つの単元に於て完成させて行くことなのである。教科書ももちろん改善されねばならぬであろうが、教師が単元を取扱う態度が先ず改められなければならぬ。最初に述べたような真の社会学習に徹することなのである。所がこれは社会を見るという極めてむつかしい問題に属するのであって、不馴れなわれわれには相当の努力のいることである。併しそれが行われなくては、真に近代的な教育とはならないから、たとえ困難であってもこれを実現する努力は必要なのである。そうして一つ一つの単元について、それが真に現実の社会現象を取扱い、従って社会の空間的な即ち地理的なあり方を把握させ、或は時代の異った社会との差異即ち歴史を明らかにして行くように改善して行くならば、はじめて現在起っている如き問題を解消させることが出来よう。

それは恐らく大変な努力を必要とすることである。すべての人々の協力により、数年をかけて成立つことなのである。併しそういう努力をしないで昔流の地理、歴史の安易な道については、ただ教育を後退させ、問題を残すだけであって、やがてまた今に倍する困難な問題を生み出すだけのものとなろう。併し社会学習を育てることは、ただこの現場の着実な努力があるのみであって、決して観念的に指導要領を改編するなどということでなし得ることではないのである。

（国立教育研究所員）